



## 説教要旨 「喜びへと招かれている」

ルカによる福音書 15章 25～32節

放蕩息子のたとえで、食べるにも困るようになって帰って来た弟の息子を、父は息子として迎え入れ、弟の無事を祝う宴会を始めました。

面白くないのは兄の方の息子です。兄はずっと父の家において、父の仕事を手伝い、毎日畑に出て、真面目に働いてきたのです。この兄は、弟の帰郷と、それを喜ぶ父の様子を聞いた兄は、怒って家に入ろうとしないのです。とんでもない罪を犯して、好き勝手やってきた弟が、こんな簡単に赦されてしまうのだったら、自分が今まで父に尽くしてきたのは何だったのか。真面目にやってきた自分の歩みを全否定されたように思えたのではないのでしょうか。

私たちもこの兄のような怒り、嫉妬の思いに陥ることがしばしばあるのではないのでしょうか。特に、自分の方が苦勞したり、努力したり、がまんしているように思えるのに、楽をしているように見える人の方が認められたり、よい思いをしているような体験をする時に、私たちの心は、その人に対する、またそのようなえこひいきをしている神様に対する怒りで満たされてしまうのです。

ファリサイ派の人々や律法学者たちが、イエス様が神の教えを語りながら、徴税人や罪人たちを迎え入れているのを見て激しい怒りと憎しみを覚えたのはまさにこのことによつてです。自分たちが神の掟を守って熱心に信仰に励んでいることを否定されたような思いを彼らは抱いたのです。

私たちはつい物質的な恵みにばかり目を奪われて、何がある。何がない。ということで一喜一憂してしまいます。しかし私たちには何物にもかえられない恵み、主がいつも共にいてくださるといふインマヌエルの約束が与えられているのです。このたとえに描かれている父の、離れていた息子の帰還を手放して喜ぶ姿に、私たちはこのインマヌエルの喜びが、私たちだけの喜びではなく、神さまにとっての大きな喜びであることを知らされています。

人間の価値観においては辛く苦しい状況に置かれたとしても、どこどこまでも愛してくださる神様が共にいてくださるのです。